

斎藤健著「転落の歴史に何を見るか—奉天会戦からノモンハン事件へ—」

ちくま新書 2002年3月10日刊を読む

歴史の教訓—エリートのもつ意味—

1. (1) 歴史の教訓といえば、京都大学教授の中西輝政氏の『大英帝国衰亡史』は、大変示唆に富む視点を提供している。中西氏は、大英帝国が他の歴史上の大国に比して優れていたのは、衰亡していると言われながらも、長い期間、その栄光を維持し続けた点にあるとする。そのうえで、それができた最大の要因は、異端のエリートの存在だったと主張している。

(2) つまり、英国がそのときどきの社会的風潮に安易に流され、おかしな方向に進もうとしているそのたびごとに、それはおかしいではないかと、体を張って代替案を展開するエリートが出現してきたことに注目し、それを許容する英国の風土の重要性を指摘している。

(3) ここで外してはならないポイントは、英国という国が、近代ヨーロッパの歴史において民主主義を最も早く体現し、最も高度に成熟させてきた国であるという点である。その民主主義の権化であるような英国において、幾多の困難を救ってきたのは、じつはエリートきょしんたんかいの存在だったというアイロニーのもつ意味を、今の日本人は、もう少し虚心坦懐に噛みしめてみる必要があるのではないかと。 P118

2. (1) こう見てくると、選ばれ方を問わずして、選挙で選ばれさえすればその人がオールマイティで当然なんだという議論は、単純すぎる議論であるのがわかる。むしろ、問題の設定は、日本はどのような形で民主主義を補完するのが一番いいか、というものであるべきである。そのコンテキストの中で、政治はこう改革すべきだし、官僚制はこう改革すべきだというのが理性的な議論の展開方法である。

(2) そして、冷徹に論理を追求すれば、もし、有為な人材の確保という観点からの「政」のほうの改革に絶望感が漂うならば、セカンドベストの方策として、それではそれを「官」がどう補完するかという着想も必要になる。

(3) アジアの経済危機やわが国の金融危機を通じてスクリーン上に浮かび上がってきたものは、国家間の政策の相互作用が拡大する中で、先進各国は、他国に配慮しながらもいかに自国に有利な政策展開を行い、国際世論の支持を獲得するかといった、いわば、政策立案

競争の時代に足を踏み入れているという現実である。世界経済のパイ拡大がそう見込めなくなってくれば、どの国がババを引くか、それはババ抜きゲームの様相さえ呈する。P119

3.(1) 明治の指導者たちが持ち、英国のエリートたちが何世紀にもわたって引き継いできた「道徳的緊張」を、政・財・学・官などの責任ある立場にいる日本人の一人一人の心の中にとりもどすことである。

(2) 明治時代に比べ現在は、民主主義の制度的完成度からいえば、はるかに進んでいる。しかしながら、指導者の質・能力という見地に立てば、現在のほうが衰えているような気がしてならないのは筆者だけだろうか。この点に思いをいたせば、どんな制度的改革も、日本人の心の問題を抜きに論じることにはできないということになる。

明治時代に日本人の心のありようを記述した名著に、先に触れた新渡戸稲造の『武士道』がある。この本は、日本人のことを外国に正確に理解してもらいたいという思いで英語で書かれたものであり、日清戦争と日露戦争の戦間期である 1899 年に出版された。

(3) まことに明治のエリートの見識の深さに驚かされる著作であるが、興味深いのは、新渡戸博士が日本人の精神・文化を理解してもらうために「武士道」を取り上げている点である。新渡戸博士は、禁欲や公の精神など、西欧のプロテスタンティズムと「武士道」の中に数多くの倫理的な共通項を認め、その「武士道」の精神が失われつつあることを、あたかも日本の良さが失われるかのごとく嘆いているのだが、それは、まさに、健全なエリートたちが日本史の舞台から立ち去るのと軌を一にしているのである。

(4) 別に「武士道」を復活せよと言っているわけではない。いかなる国、いかなる時代においても、指導的立場にある人々が、「公のために最後のところで踏みとどまる強固な自律の精神」を持っていなくてどうするのかということである。これは政治家や官僚のみに求められるのではなく、経済人、医者、教育者、そして、ジャーナリストにも同じように求められる。

(5) 「官」にある人間の一人として、続発する官僚不祥事は正視にたえないものである。多くの人々が集まる場において、「官」であるということで身の縮むような思いをしている人間は自分一人ではあるまい。しかし、である。なおも、なにゆえ、この道を選んだかという原点、たいへん口幅ったく聞こえることと思うが、この大好きな日本のために貢献したいと思う気持ちを持ち続け、歯がみしている人間も自分一人ではあるまい。

「道徳的緊張」については、司馬氏も新渡戸博士も、失われてしまったと嘆いている。われわれの忘れものとして最も大きいのは、この心の問題ではなからうか。なぜなら、制度を変え、組織を変えるのも、人間だからである。

(6)が、ことは、心の持ちようの問題である。社会のそれぞれの分野で、せいぜい二割の人間が心がければ回復できないことはあるまい。

P135 ~ 137

[コメント]

世界大恐慌に近いとも言われるこの度の大不況をどう乗り切るかは、「道徳的緊張」観をもった財政出動ができるか否かにかかっている。

目先の「売上協力」を公共事業ですれば、デフレは乗り切れるという安易な発想が与野党・官界に蔓延している。

日本や世界の各地域の真の発展とは何かを考えての緊急対策や予算策定が望まれる。

- 2009年3月9日林明夫記 -